

提言

日本は世界に必要とされる国となれ
「これでいいのか日本」と毎日自ら問い合わせ続けることが肝心。
本誌主幹 大中吉一

本誌が創刊して53年目に入った。半世紀を超える歴史を重ね、常に走り続けてこられたのは読者の皆さんのおかげである。まず感謝申し上げる。

本誌を創刊するにあたり、伊勢神宮に参拝し、我が師匠である「昭和の參謀」瀬島龍三先生の薰陶に触れ、ひたすらに真実を追い求めてきたが、それは言い換えれば、毎日の反省と自分自身に対する問い合わせの繰り返しであった。眞のジャーナリズムとはどうあるべきか、どこかにおもねたり奢ったりする姿勢はなかっただろうか。正しいオピニオンを発信できただろうか。

こうした思いの繰り返しの中から、今日の「公論」が紡がれてきたのである。

一流大学を優秀な成績で卒業し、我が国の中でも第一級のエリートであるはずの官僚たちの不祥事が相次ぎ、その名声は地に落ちた感がある。それでも毎日の反省と「これでいいのか日本」という問い合わせを続けることで汚名を雪ぎ名誉挽回を達成していただきたいと思う。

振り返ってみれば、日本は戦後より75年以上を経た今日まで、ただ一人の戦死者も出してこなかった。これは世界に誇るべき偉大なる歴史的事実である。この歴史を背景に日本は世界に必要とされる国となれるのか。

日本の誇る技術立国、環境立国はもとより、日本人の平均寿命が女性87.14歳、男性80.98歳と世界に冠たる長寿大国になった今日、健康で長生きすれば福祉にかかるお金も減ることになり、国の新しい形としての低福祉・低負担というシナリオを達成する道も見えてくる。つまり、国民がいかに健康に長生きできるのか、「健康立国」を目指さなければならないのだ。

2021年、東京オリンピック・パラリンピックの翌年に、関西で開催される予定の生涯スポーツの世界大会「ワールド・マスターズ・ゲームズ」。中高年のオリンピックと呼ばれるこの大会で、日本の中高年層は多くのメダルを獲得することだろう。

「長寿大国」は「健康立国」の上に成立しなければ意味がない。

日本のリーダーたちは戦後の歴史の中で重ねてきた平和の歴史をしっかりと捉え、未来に向けて世界の中における日本の立ち位置を考えながら、毎日の反省と、「これでいいのか日本」という問い合わせを続けていかなければならないのだ。

この先、2050年、2100年と続していく未来の中で、日本という国が小さいながらもピカッと光る存在で有り続けて欲しいと願う。

本誌も、日々の反省と「これでいいのか日本」の問い合わせを忘れずに進んでいけたらと願う。

KORON